

Offprint from:

『創価大学・国際仏教学高等研究所・年報』
平成16年度（第8号）2005年3月発行

*Annual Report of
The International Research Institute
for Advanced Buddhology
at Soka University
for the Academic Year 2004
[= ARIB], vol. VIII, March 2005*

工藤順之

「(Mahā-)Karmavibhaṅga 所引經典類研究ノート(2):
Purvāparāntakasūtra / Devatāsūtra」

Noriyuki KUDO

Philological Notes on the Quotations in the (Mahā-)Karmavibhaṅga (2):
Purvāparāntakasūtra / Devatāsūtra

The International Research Institute for Advanced Buddhology
Soka University
Tokyo · 2005 · Hachioji
JAPAN

創価大学・国際仏教学高等研究所
東京・2005・八王子

(Mahā-)Karmavibhaṅga 所引經典類研究ノート (2)¹ — Pūrvāparāntakasūtra / Devatāsūtra —

工藤 順之

はじめに

前拙稿では (Mahā-)Karmavibhaṅga に引用される数多くの文献の内、經典名を明示し尚かつ複数回引用される4種の經典の中で、1. Nandikasūtra を取り上げた²。本稿では引き続き、他の二つの經典、即ち 2. Pūrvāparāntakasūtra と 3. Devatāsūtra を取り上げて検討する³。

2. Pūrvāparāntakasūtra

Pūrvāparāntakasūtra という名を挙げて言及するのは § 8 と § 34 の二箇所である。更に經典名を明示していないが、恐らくはこの經に基づいていると思われる言及箇所も § 46 に見出せる。

2.1. 引用・言及箇所

2.1.1. § 8

最初は § 8 「高名をもたらず業」での例示である。ここで挙げられる業は、「嫉妬心がないこと、貪りのないこと、他人の所得を喜ぶこと、他人が名声を受けたり・

¹ 本稿から、Lévi 出版本に由来する Mahākarmavibhaṅga というテキスト名を Karmavibhaṅga に統一し直すことにした。その理由は Kudo 2004a: x-xi に述べたが、第一に前者の読みは写本Aの奥書にのみ見出され、その写本には当該テキストとそれに対する注釈書が続げざまに筆写されていて、我々が対象とするテキスト単体の名前とは思われないこと、第二に写本Bは当該テキストのみが筆写され、その終わりに Karmavibhaṅgasūtra とあること、第三に対応するチベット訳冒頭には「インド語で Karma vibhaṅga」とあること、以上の理由からである。テキストは、形式的には「スートラ」と呼べるものではなく、内容的にもそれ自体がスートラの注釈書と見なせるものであるから（写本Bの読みは、したがって、注釈の対象としての經典名をそのまま流用したものであろう）、「鸚鵡經類」第一類のスートラが増広され、他文献からの引用を挿入して出来上がった論書のようなものとして扱うべきであると考えられる。問題とするテキストを Karmavibhaṅga と呼ぶことは、筆者が最初ではなく、対応するチベット訳、コータン語、クチャ語等のテキストを扱った研究でも為されている。このような扱いがされていることもテキスト名の統一を図る理由の一つである。

² 工藤 2002 を参照されたい。この經典にはサンスクリットテキストが現存せず、チベット訳のみが存在する。内容を検討することによって、經典名が全く異なるものであるが、KV で言及される内容を有し、更にチベット訳にもほぼ相当する内容を持った漢訳經典が存在することを明らかにした。それは訳者が不明ながら（經録では安世高とされるがその同定は極めて疑わしい）、『佛説出家緣經』（T No. 791, vol. 17, 736b3-c19）である。

³ 複数回引用・言及される4種の經典の内、残る一つは Cakravartīsūtra である。これについては並川 1984b, 1985a と工藤 2004b: 239-245 を参照されたい。

賞賛されたりする声を聞くことを喜ぶこと、他人を賛辞することを好むこと、世尊の塔廟を建立させること、卑しい人・誠実でない人・善根に欠ける人を遠ざけること、高名となる善根を持つ人を奨励すること、菩提心を生ずること、高名な人となる善根の全てに向けて菩提心を生ずること」の十種である⁴。上記の十の行為のうち、恐らくは後半三項目を例証する経典として言及されたものであると思われるが、下に見るように内容的には引用というより経典の一部を要約したものであるから、具体的にどの業を例証するものなのかは特定できない。尚、この部分にはA写本からのみテキストが得られ、B写本は当該貝葉が欠落している。

§ 8-a). 39.13-40.7 [TEXT: 56]; A17r.4-v1; B lost.⁵

yathoktam Bhagavatā Vārāṇasyāṃ Pūrvāparāntake sūtre Ajitasya Bodhisatvasya samuttejanam
kṛtam | mah(a)te khalu te 'jita autsukyāya cittaṃ damayati | yad idaṃ saṃghaparihāp(ān)āya |
vakṣyate hi |

Maitreyas tuṣitasurālayādhivāsī
prāptavyā divi bhuvī ceha yena pūjā |
sa śrīmān daśabalatām avāpya śighram
lokānām bhavatu śaśiva nityapūjyaḥ |

「例えば世尊がヴァーラーナシーにおいてボサツ・アジタを鼓舞したことが『プールヴァ・アパラータカ・ストゥラ』に説かれている。

実にアジタは壮大なる意欲を自制した、それは即ち、サンガを捨てることである。
それについて次のように言われる。

『トソツ天に住むマイトレーヤは天上でも地上でも供養されるべきである。聖なる彼は速やかに十力を得て、世間の人々が常に供養するものとなれ、恰も月のように』

アジタを鼓舞したのは何故なのか、サンガを捨てるというアジタの意欲がどのような経緯で語られたのか、そのきっかけは何であったのか、ここで言及されている前後の脈絡は全く不明であり、それ故内容を取意した言及であると言える。

続いて偈が引用されるが、Pūrvāparāntakasūtra からの引用であるかどうか不明である。その内容もトソツ天に住むマイトレーヤに言及し、アジタの事を語った直後の引用であることから、弥勒仏思想に見られる「(経典が語られている時点での現在世の)アジタ = (未来世の)マイトレーヤ」という関係を前提としているようにも受け取れるが、後述する対応漢訳ではアジタとマイトレーヤが別人として登場しているので、ここでの言及個所が当該経典に全て含まれていたとは今のところ言えない。

この言及例から判る Pūrvāparāntakasūtra の内容はアジタが登場すること、出家生活を捨てようとして世尊に思い留まされたこと、更に明確ではないもののアジタとマイトレーヤの両者(或いは同一人物)に関わる内容が含まれていることになる。

2.1.2. § 34

KV §§ 33-36 にかけては「幸福・不幸」と「生涯の前半・後半」との組み合わせ

⁴ この部分はサンスクリットテキストで言えば、「鸚鵡経類」第一類に属する中央アジア写本の Śukasūtra (Hoernle 56r.2-v.1)にも対応箇所がある。

⁵ テキストの提示に際しては、該当する Lévi 出版本での分節番号、Lévi 出版本の頁・行数に加え、[TEXT: ***] に筆者による KV 写本の再翻刻テキストの対応頁と二つの写本の葉・行数を挙げた。写本における細かな異読の類は再翻刻テキストを見られたい (Kudo 2004a)。

で4種の業報を説いていくが、この第34節はその第二番目になる「前半は不幸であるが後半は幸福になる業」を説明する。この業は布施を請われて一旦は承知するが、いざその段になると布施することを渋る人物が、結局布施をして喜びの心を生じることである。こうした業によってこの人物が人間として生まれた場合、貧乏な家に生まれるが後に財産が増大するとされる。

その例示として二つの物語(avadāna)が言及される。一つは今問題にしている Pūrvāvarāntakasūtra、もう一つは典拠不明であるがシュラーヴァスティの貧しい男の妻の布施物語である⁶。Pūrvāvarāntakasūtra への言及部分は両写本ともあり、その内容はほぼ一致している。

§ 34-a). 66.19-67.4 [TEXT: 134-35]; A39v.3-5; B22r.4-5:

atra cĀniruddhasyāvadānaṃ vaktavyam | tena kila Rājagrhe [B adds: nagare] śyāmākataṇḍulabhaktam Upāriṣṭasya pratyekabuddhasya piṇḍapāto dattāḥ | taddiṣvasam eva rājñā tuṣṭenāṣṭau mahāgrāmā dattāḥ | tac ca paścimakam dāridryam | yathā tasyaiva vyākaraṇam **Pūrvāparāntake [B: Pūrvāparānte] Sūtre |**

「さてア Niluddha の因縁物語が語られるべきである。(即ち、彼は) ラージャグリハにおいて ウパーリシュタという独覚⁷に粟と米との食事を供養した。その日の内に、感激した王は(彼に) 八つの大きな村を与えた。これが(彼にとっては)最後の貧乏暮らしであった。『プール

⁶ 漢訳仏典の中にほぼ同じプロットで語られる文献がある。Kudo 2004a: “Annotations” Note 51, 277-78 参照。

⁷ この独覚の名前には Lévi の校訂に問題がある。Lévi は当該箇所脚注で B 写本では Upāriṣṭa (upa + ariṣṭa) とあり、A 写本では apāci. tasya とあるとし [1932: 66-7, fn.14]、おそらくはパーリからの類推で Upāriṣṭa としたものであろう。Edgerton は BHSD にこの語を引いて、次のように用心している: 「Lévi はテキストの中で Upāriṣṭa と印刷しているが、写本に裏付けられたものではない。脚注で彼は一つの写本が Upāriṣṭa とあると言う(もう一方の写本は欠損しているが apā- と始まっていることから第二音節が ā であることを表している)」(BHSD p. 146, upāriṣṭa)。Upāriṣṭa とする写本は先に見たように B 写本であるが、A 写本は実際には欠損していない。何故、欠損したかのような表記で、しかも語頭の u- を a- と、-ṣṭha- を -ta- と間違えた読みを挙げているかが理解し難い。語頭の読みについて言えば、その音は A 写本では直前の -m と一文字を構成していて、基字 m- の下には明らかに母音記号 -u が書かれている。また ṣṭha も綺麗に残っている。この写本では ṣṭ と ṣṭh とが頻繁に交代し、それも僅かな筆写上の差異で起こりうる。従って、-ṣṭh- とあっても -ṣṭ- と読替することに何ら差し支えはない。Lévi の読みは原写本でなく転写された写本に基づいた為のミスであろう。テキストを upāriṣṭasya と訂正する。

更に Lévi は対応漢訳である『中阿含經』『説本經』での独覚の名前(無患)を前出の注の中に挙げている。この訳語はサンスクリット語の a-riṣṭa に対応する。諸漢訳からこの独覚の名前を拾い出してみよう。あくまでもア Niluddha に関係する記述を持つ文献だけに限ることとする。

『説本經』: 「有一辟支佛。名曰無患(Wúhuàn)」;

『佛說古來世時經』: 「彼有緣覺名曰和里(Héilǐ)」;

『佛本行集經』: 「有辟支佛。名婆斯吒(Pósizhà)」;

『佛五百弟子自説本起經』: 「遭遇見沙門 大通和菴吒(Héilǐzhà)」;

『根本説一切有部毘奈耶破僧事』(T 1450, vol. 24, 144b22-23): 「烏波利瑟吒(Niāobōlìsèzhà)辟支佛」;

『經律異相』(T 2121, vol. 53, 68ab4): 「有辟支佛。名披栗吒(Pīlǐzhà)」(この典拠は『中阿含經』第十二卷とあるが、現行のそれには対応しない);

『大乘大義章』卷上(T 1856, vol. 45, 127b): 「阿泥律陀。供養波利陀(Bōlituō)辟支佛」。

以上のように、「説本經」以外は全てが音写語となっている。尚、Yaśomitra の『俱舍論』註にはア Niluddha が供養する独覚の名前は「タガラシッキン」である [IV, v. 95a]: tena janmāntare Tagaraśikkhine pratyekabuddhāya piṇḍapāto dattāḥ.

ヴァ・アパランタカ・スートラ』に説かれている彼の授記のように。」

この言及部分の最後になって Pūrvāvarāntakasūtra を例示として挙げているので、その前に書かれた彼の事跡全てが同経からの直接の引用かどうかは断定できない。しかし、ア Niludda が嘗てウパーリシュタ独覚に食事の供養をしたことで授記をうけたことになっており、その内容は「最後の貧乏暮らし」という点から、過去世から見た未来世（即ち現在世）における富裕な生活を約束されたことであろうと思われるから、この経典に含まれていてもおかしくはない内容に言及していると言える。またここでは過去における業によって王から報賞を受けたことも書かれている。いずれにせよこの経にはア Niludda が独覚への布施によって授記を受けた内容が書かれていることになる。

2.1.3. § 46

§ 46 では「心身ともに安楽となる人」として煩惱を全て焼き尽くし、徳ある所行をした阿羅漢が挙げられ、その一例としてア Niludda が言及されている。しかし、典拠についての明示はされていない。

§ 46. 76.17-77.4 [TEXT: 166-67]; A48r.5-v.3; B27v.4-28r.1:

yathā cārya-Aniruddhaḥ kathayati |

"tasya khalv āyusmantāḥ (eka)piṇḍapātasya vipākataḥ saptakṛtvāḥ praṇītaṃ trāyastriṃśadevanikāyeṣūpapannaḥ saptakṛtvo manuṣyeṣu rājyaṃ kārītaṃ | tasyaiva ca piṇḍapātasya vipākenaitarhy apy ahaṃ lābhi [B: (pi)ṇḍapātavipākena arhatvaphalalābhi] cīvarapiṇḍapātaśayanāsanaglānapratyayabhaiṣajyapariskārāṇaṃ lābhi | tathā hi tasya Bhagavatā durbhikse pañca bhikṣusātāni dattāni | tasya puṇyānubhāvena sarveṣāṃ divyānantaryabhaktam prādurbhavati" |

「例えばア Niludda 尊者は次のように語った。

『諸賢よ、（一度の）食施の果報として七度に渡って三十三天の天界に生まれ、七度に渡って人間界で王位に就いた。食施の果報として実に私は【下線部：MS[B]では「阿羅漢果を得て、】衣・食物・臥具・医薬など身の回りの物を得た。』

こうした理由で世尊は飢饉の際、五百人の僧たちを預けたのである。彼の福德の力によって全ての人に妙なる無限の食べ物が出現したのである」

この箇所は、ア Niludda の言葉を引用する形になっているので一部は直接の引用として見なすことができるだろう。内容的には食物の供養によってそれぞれ七回ずつ天上界と地上とに生まれ、不自由の無い生活を送ったことが述べられている。ここでは、ア Niludda は食施によって前世において部派的な修行階梯である預流果を得ていたこと、そして写本の読みの違いによって今生では「阿羅漢果を得た」ということを記述している。更に、それに続く部分では、ア Niludda の言葉であるのかどうか判断がつかないのだが、世尊が五百人の僧衆を彼に預けたこと、また彼の食施の力によって彼だけではなく全ての人に引き渡るだけの食物が得られたことが書かれている。

ここでは典拠に関して何ら情報は提供されていないが、ア Niludda の過去世に言及する § 34 の引用例との関連から Pūrvāvarāntakasūtra からの引用である可能性は捨てきれない。

2.1.4. KVU における言及箇所

KV ではないが、その注釈書とされる *Karmavibhaṅgopadeśa* にもア Niludda に言及した箇所がある。これは世尊に対して浄信を向けることの果報を述べる中で、カルネースマナ、アショーカなどが得た果報を挙げた後で語られる部分である。

KVU. Lévi 154.16-18; A62v.1:

tathā cĀniruddhaphrabh(ṛ)tinām caikapaṇḍapātapradānena cakravarttirājya(m) sapta devarājā pa(ś)cime ca bhava a{{ra}}rhatvaṃ cāgrata evamādinī ca bahūni vaktavyāni |

「また、ア Niludda 等が一回の食事の供養によって転輪聖王の位に就くこと七回、天の王となること（七回）、そして最後の生涯では阿羅漢位を得た。以上のように種々説かれている。」

この部分は特定の経典からの引用と示されていないが、2.1.2-3 で見た内容に一致する。ア Niludda の得た果報としては預流果から阿羅漢果という二つが記述され、KV § 34 の写本 B に見られる読みと一致する。

以上、*Pūrvāvarāntakasūtra* からの引用もしくは取意の内容を挙げてきた。例示として挙げられた内容から、この経にはアジタ、マイトレーヤ、ア Niludda という 3 人が登場し、またそれぞれに関係する因縁話が語られていることになる。

2.2. 対応漢訳

さて、サンスクリット本 *Pūrvāvarāntakasūtra* そのものは現存しないが、対応する漢訳文献は以下の通りである⁸。

『中阿含經』第六十六經「説本經」(T 26(66), vol. 1, 509c9-511a29).

『佛説古來世時經』失訳 (T 44, vol. 1, 829b6-831a2).

両経は同本異訳の関係にあるとされるが、詳しく検討していくと「中阿含經」の伝承に関係する極めて面白い事実が判明する。それについては本項末の【二つの対応漢訳について】(p. 34 以下)で扱うので、まずは『中阿含經』「説本經」の内容を概観しておこう⁹。

この経はおおよそ内容を三つの部分に分けることが出来る。食事後、僧たちが出家と在家とではどちらが勝るのかを論じていた時に語られる阿那律の過去物語、次いで世尊がその出現を予言する未来世の転輪聖王と弥勒仏及びそれぞれになりたいとするアジタと弥勒の話、そして現在世での波旬による世尊の説法妨害とである。各部分について事跡として語られることを簡単にまとめておく。

世尊が波羅奈國、鹿野園に居たときのこと。

(1) 過去世：阿那律過去物語

波羅奈國に住み、貧窮で、家畜にやる草を集めては運ぶ仕事をしていた。当時国は災害と旱魃で飢饉の状態にあり、無患という名の辟支佛がいたが、乞食をしても鉢はいつも空であった。

⁸ チベット訳は存在しない。しかしシャマタデーヴァによる俱舍論註にはこの経典が言及されている：本庄 1983: 66-67。寺岡 1986 は『説本經』を中心として弥勒思想の起源を探ろうとしたものであり、本庄の指摘に基づきこのサンスクリット語タイトルを **Pūrvāparānta-sūtra* 或いは **Pūrvāparāntika-sūtra* と予想している。特に後者の推定は *Maitreyavyākaraṇa* (ネパール写本) 冒頭で為されるこの経への言及に基づく。

⁹ この経の、特に後半は渡辺照宏博士による現代語訳がある (渡辺 1966[1982]: 76-82)。

それを見て阿那律は自分の食事を供養しようとしたが、辟支佛は半分ずつにしようと言った。しかし、阿那律は自分はいくらでも食べることは出来るといって、辟支佛に全て与えた。この供養によって彼は天界の王と地上の王とにそれぞれ七回生まれ変わり、現在世では釈迦族に生まれることになった。

(2) 未来世：人壽八万歳の時代に出現する轉輪聖王・螺と弥勒仏¹⁰

世尊は比丘たちが阿那律の過去物語を聞き法を説くのを聞いて講堂にやって来て、今度は未来の事を以て法を説き始める。

人壽八万歳の時、螺という名の轉輪聖王が出現する。その後彼は出家し、成道に至るとする。それを聞いたアジタはそうになりたいとの望みを世尊に告げる。世尊は彼を叱責するが願いを承認する。

続いて世尊は人壽八万歳の時代に出現する弥勒仏について語る。それを聞いた弥勒はそうになりたいと世尊に告げ、世尊はそれを賞賛し、願いを承認し、金縷織成衣を授与する。

(3) 現在世：摩波旬による世尊の説法妨害 (KVで何ら触れられていないので省略)

2.2.1. § 8-a) との対応¹¹

KV § 8-a) に見られる言及では、「アジタがサンガを捨てるという望みを持ったこと」、「それを世尊に叱責され撤回したこと」が述べられている。こうした内容は先の『説本經』では、人壽八万歳の時代に現れるとされる轉輪聖王になりたいとするアジタの願いと¹²、世尊がアジタの願いを聞いて彼が「更に一度死して再び終わることを求めている」として「愚癡である」と叱責する部分に相当する。しかし、世尊はアジタの願いを承認するだけでアジタがその願いを撤回したことは書かれていない。

次いで対応漢訳では、世尊が未来において弥勒如来が出現することを説き、それを聞いた尊者・弥勒が未来世にその弥勒如来になりたいと願い、同じく世尊にその事を約束され、世尊から金色の衣を授与される¹³。この部分は KV には述べられていないが、KV にはマイトレーヤ仏に関する偈が存在する。しかし対応漢訳には弥勒仏に関係する韻文はない。KV の言及箇所に見られる偈は、この經典のサンスクリットテキストに存在した可能性も捨てきれないが、漢訳との対応関係から推測すると別の文献からここに引用されたものと考えるのが適当であろう¹⁴。

【資料】

『中阿含』「説本經」(T 26(66), vol. 1, 509b26-511b9, esp. 509c9-511a29);

世尊告曰。「諸比丘。未來久遠當有人民壽八萬歲。人壽八萬歲時。此間浮洲極大富樂。多有人民。村邑相近。如雞一飛。諸比丘。人壽八萬歲時。女年五百乃當出嫁。諸比丘。人壽八萬歲時。唯有如是病。謂寒。熱。大小便。欲。飲食。老。更無餘患。

諸比丘。人壽八萬歲時。有王名螺。為轉輪王。聰明智慧。有四種軍。整御天下。由己自在。如法法王成就七寶。... ..」

爾時。尊者阿夷哆在衆中坐。於是。尊者阿夷哆即從坐起。偏袒著衣。叉手向佛。白曰。「世尊。我於未來久遠人壽八萬歲時。可得作王。號名曰螺。為轉輪王。... ..」

於是。世尊訶尊者阿夷哆曰。「汝愚癡人。應更一死。而求再終。所以者何。謂汝作是念。『世

¹⁰ Divy. No. 3: Maitreyāvadāna には Vāsava 王と Danasamanta 王が覺者 Ratnasikhin に食事の供養をした後で、それぞれが一方は「この善根によって轉輪聖王に成りますように」と、他方は「この善根によって正等覺者に成りますように」との誓願をたてる。この誓願の為に将来、轉輪聖王シャンカと如来マイトレーヤが出現すると世尊は語る。これについては平岡 2002: 279 を見よ。

¹¹ Cf. Kudo 2004a: “Annotations” Note 9, 238-40.

¹² 「説本經」では世尊が轉輪聖王の出現を語ったあとで轉輪聖王についての長々とした話が続く。しかし『古來世時經』にはない。

尊。我於未來久遠人壽八萬歲時。可得作王。號名曰螺。為轉輪王。... ..」
 世尊告曰。「阿夷哆。汝於未來久遠人壽八萬歲時。當得作王。號名曰螺。為轉輪王。... ..」

佛告諸比丘。「未來久遠人壽八萬歲時。當有佛。名彌勒如來。無所著。等正覺。明行成為。善逝。世間解。無上士。道法御。天人師。號佛。衆祐。猶如我今已成。... ..」
 爾時。尊者彌勒在彼衆中。於是。尊者彌勒即從坐起。偏袒著衣。叉手向佛白曰。「世尊。我於未來久遠人壽八萬歲時。可得成佛。名彌勒如來。... ..」
 於是。世尊歎彌勒曰。「善哉。善哉。彌勒。汝發心極妙。謂領大衆。所以者何。如汝作是念。
 『世尊。我於未來久遠人壽八萬歲時。可得成佛。名彌勒如來。... ..』」
 佛復告曰。「彌勒。汝於未來久遠人壽八萬歲時。當得作佛。名彌勒如來。... ..」

『佛說古來世時經』(T 44, vol. 1, 830a5-c2).

佛言。「當來之世人當長命壽八萬歲。此閻浮提人民熾盛五穀豐賤。人聚落居鷄鳴相聞。女人五百歲乃行嫁耳。都有三病老病大小便。有所思求。
爾時有王號曰為軻。主四天下為轉輪聖王。治以正法。自然七寶金輪白象紺馬明珠玉女之婦藏臣兵臣。... ..」
 爾時賢者比丘在會中。即從坐起。偏袒右肩。長跪叉手白世尊曰。「我當來世當為軻王乎。... ..」
 於是世尊呵詰比丘。「咄愚癡子。當以一生究成道德。而反更求周旋生死。言我來世為轉輪聖王貪於七寶。千子勇猛然後入道。」
 佛告比丘。「汝當來世得為軻王主四天下。廣施一切出家成道。」

佛告比丘。「後來世人其命增長八萬歲。當有世尊號曰彌勒如來至真等正覺明行成為善逝世間解無上士道法御天人師號佛世尊。如我今也。... ..」
 爾時賢者彌勒處其會中。即從坐起偏袒右肩。長跪叉手前白佛言。「唯然世尊。我當來世人壽八萬歲時。當為彌勒如來至真等正覺。教化天上天下如今佛耶。」
 於是世尊讚彌勒曰。「善哉善哉。乃施柔順廣大之慈。欲救無數無極之衆。乃興斯意欲為當來一

¹³ 同様の記別を受ける内容が『賢愚經』(五七)「波婆離品」第五十にもある(T 202, vol. 4, 435b27-c4):「於時彌勒。聞佛此語。從座而起。長跪白佛言。願作彼彌勒世尊。佛告之曰。如汝所言。汝當生彼為彌勒如來。如上教化。悉是汝也。於時會中。有一比丘。名阿侍多。長跪白佛。我願作彼轉輪之王。佛告之曰。汝但長夜。貪樂生死。不規出耶。」これは波婆梨が十六人のバラモンを世尊の下に派遣し、それぞれに質問させる内容である。これは『スッタ・ニパータ』第五章「彼岸に至る道の章」に遡ることができる。ここではアジタはマイトレーヤとは別人であるが、後に別のアジタが彌勒と同一視され、未來仏の彌勒となる。

漢訳に残る所謂「彌勒經典類」の研究は、主立ったものだけでも古くは松本文三郎『彌勒淨土論』(丙午出版社, 1912)、林屋友次郎『異譯經類の研究』(東洋文庫, 1945: 141-172)、赤沼智善『佛教經典史論』(1939年, [復刻, 1981年], pp. 194-216)等があり、また Sylvain Lévi, “Maitreya le consolateur” (in: *Études D'orientalisme: La Mémoire de Raymonde Linossier. Tome II*, 1932, pp. 355-402), É. Lamotte, *Histoire du Bouddhisme Indien*, Louvain 1958, pp. 775-788 がある。最近の論考では、彌勒思想の起源に関連して以下に詳しい: 香川 1963, 1964; 櫻部 1965 [2002]; 梶山 1994; 石上 1994。本稿は彌勒思想全体の考察を目的としたものではないので、詳細については上述の研究を参照して戴きたい。その内の一つ、梶山 1994 では彌勒(如來)が登場する最古の文献であるパーリ『長部』第26經「轉輪聖王獅子吼經」から『スッタ・ニパータ』第5章、そして北伝阿含の諸文献、即ち本稿で取り上げている『中阿含』「説本經」とその異訳の記述を辿り、最終的に『増老阿含經』第48-3經に彌勒説話が一応の完成を見ることを明らかにしている。そしてそのような説話が未來仏・彌勒を主人公とする大乘經典に受け継がれたことを指摘する。それら大乘經典は所謂「彌勒經典類」であるが、石上 1994 がそれらの經典相互の関係について概略している。

¹⁴ 尚、『中阿含經』「説本經」や『古來世時經』が所謂「彌勒經典」とどのような関係にあるのかについては寺岡 1986 を参照のこと。この論文では、これら經典の第二部に記述される彌勒の出現を中心に論じられている。阿那律の過去物語については經典の構成を論じた部分に扱われるだけである。

切唱導。亦如我今也。汝當來世即當成佛。號曰彌勒如來... ..」

2.2.2. § 34-a) との対応¹⁵

KV にはア Niludda が「ウパーリシュタ独覚に食事の供養をしたこと」、「そのことによって王から八つの村を与えられたこと」、「それが最後の貧乏暮らしとなったこと」が述べられていて、「授記」の形で示されていることになっている。

二つの対応漢訳は内容の詳しさに多少の違いはあっても、粗筋としては同じである。『説本經』では「無患」（『古來世時經』では「和理」）という独覚に食事¹⁶を供養したことが語られている。即ち、独覚が乞食をしようとして城内を廻っても全く鉢が空のまま戻ってくるのを見た阿那律は自分の食事を供養しようとする。独覚は今が飢饉であることからその食事を半分にしようと言うが、阿那律は自分にはまだ食べるものがあるといって全てを独覚に供養する。

漢訳を見る限り、ア Niludda の事跡のうち、独覚に食事の供養をしたという記事は見つかるが、それによって「そのことによって王から八つの村を与えられたこと」、「それが最後の貧乏暮らしとなったこと」については触れられていない。後者に関しては解脱に達したという内容から「最後の生」というニュアンスが、そして食施をした後では何不自由ない生活を送ったという記事がある以上、食施をしたのが彼の「最後の貧乏暮らしの時代」であったと読むことも出来よう。

KV での引用例が原文そのものであるとは限らず、現在残っている資料が KV のテキスト形成期にも存在したわけでもないので、KV に見られる内容が現存対応文献に見出せないことは不思議ではないが、場合によれば、KV に残された内容は Pūrvāparāntakasūtra 以外のソースからの内容を混入させたものである可能性も否定できない。

【資料】

『中阿含』「説本經」(508c19-520a20):

是時。尊者阿那律陀亦在衆中。於是。尊者阿那律陀告諸比丘。「諸賢。何用益利百千萬倍。設復過是。唯此至要。若有比丘持戒妙法。成就威儀。入家受食。非為朝朝益利百千萬倍。所以者何。

我憶昔時在此波羅奈國為貧窮人。唯仰拈捨客擔生活。是時。此波羅奈國災旱早霜蟲蟻不熟。人民荒儉。乞求難得。

是時。有一辟支佛。名曰無患。依此波羅奈住。於是。無患辟支佛過夜平旦著衣持鉢。入波羅奈而行乞食。

我於爾時為拈捨故。早出波羅奈。諸賢。我登出(520a)時。逢見無患辟支佛入彼。時。無患辟支佛持淨鉢入。如本淨鉢出。

諸賢。我時拈還入波羅奈。復見無患辟支佛出。彼見我已。便作是念。『我旦入時。見此人出。我今還出。復見此人入。此人或能未得食也。我今寧可隨此人去。』時。辟支佛便追尋我。如影隨形。

諸賢。我持拈還到家。捨擔而迴顧視。便見無患辟支佛來追尋我後。如影隨形。

我見彼已。便作是念。『我旦出時。見此仙人入城乞食。今此仙人或未得食。我寧可自關己食。分與此仙人。』

作是念已。即持食分與辟支佛。白曰。「仙人。當知此食是我己分。為慈愍故。願哀受之。」

¹⁵ Cf. Kudo 2004a: "Annotations" Note 50, 274-77.

¹⁶ 『賢愚經』卷第十二(五七)「波婆離品」第五十(T 202, vol. 4, 435a21):「索其自分稗子之糜。」とある。『法苑珠林』卷第四十一、請僧部第二「如賢愚經云」(T 2122, vol. 53, 607c10-)として「稗子糜」(608a10)とある。具体的な食事の中身について述べている資料はこれだけである。

時。辟支佛即答我曰。「居士。當知今年災旱早霜蟲蟻。五穀不熟。人民荒儉。乞求難得。汝可減半著我鉢中。汝自食半。俱得存命。如是者好。」

我復白曰。「仙人。當知我在居家自有釜窖。有樵薪。有穀米。飲食早晚亦無時節。仙人。當為慈愍我故。盡受此食。」

時。辟支佛為慈愍故。便盡受之。... ..

我憶昔貧窮 唯仰拈拾活 闕已供沙門 無患最上德 [v.1]

因此生釋種 名曰阿那律 [v.2ab]

『佛說古來世時經』(829b15-c5):

於時賢者阿難律在彼會中。聞說法言。「答報之曰。何但百千。正使過此無極之寶。猶不及長者供養飯食真戒比丘。所以者何。

憶念吾昔在波羅奈國。穀米踊貴人民飢饉。我負擔草賣以自活。

彼有緣覺名曰和里。來遊其國。

我早出城欲擔負草。爾時緣覺著衣持鉢入城分衛。中道吾負草還於城門中。復與相遇空鉢而出。和里緣覺遙見吾來。即自念言。『吾早入城此人出城。今負草還。想朝未食。吾當隨後往詣其家。乞可以適飢。』

我時擔草自還其舍下草著地。顧見緣覺追吾之後如影隨形。

我時心念。『朝出城時見此緣覺入城分衛。而空鉢還。想未獲食。吾當斷食以奉施之。』即持食出長跪授之。「身安隱具。願上道人愍傷受之。」

時緣覺曰。「穀米飢貴人民虛饑。分為二分。一分著鉢一分自食。爾為應法耳。」

身報之曰。「唯然聖人白衣居家。炊作器物食具有耳。徐炊食之早晚無在。道人願受加哀一門。」

時彼緣覺悉受飯食。... ..

吾曾擔負草 貧窮備以活 供養於沙門 和里緣覺稱 [v.1]

因斯生釋種 號曰阿難律 [v.2ab]

2.2.3. § 46 との対応¹⁷

前節で検討した対応漢訳の当該箇所の後で、阿那律は自分の行為がどのような果報をもたらしたのかを比丘たちに告げる。それによると、天上界と地上とでそれぞれ七回ずつ王となったこと、衣食住に関して何ら不自由な生活を送ることが出来たことが残されていて、KV で言及されているア Niludda の事跡と一致する。ただ対応漢訳には飢饉に際して世尊が五百人の比丘を阿那律に預けたという内容は書かれていない。引用／言及元が Pūrvāparāntakasūtra であったとすれば、この点も前節と同様に、現存する対応漢訳と KV が引用したソースとの違いがあった可能性を充分考慮しなければならない。阿那律ただ一人の事跡に言及する為に、複数の資料から引用或いは言及されたと考えるよりも、この例証も Pūrvāparāntakasūtra を典拠としたものと見なしても良いだろう。

【資料】

『中阿含』「説本經」(509a20-b5):

諸賢。我因施彼一鉢食福。七反生天。得為天王。七反生人。復為人王。

諸賢。我因施彼一鉢食福。得生如此釋種族中。大富豐饒。多諸畜牧封戶食邑。資財無量。珍寶具足。

諸賢。我因施彼一鉢食福。棄捨百千垓金錢王。出家學道。況復其餘種種雜物。

諸賢。我因施彼一鉢食福。為王王臣梵志居士一切人民所見識待。及四部衆比丘比丘尼優婆塞優婆夷所見敬重。

¹⁷ Cf. Kudo 2004a: "Annotations" Note 64, 300-3.

諸賢。我因施彼一鉢食福。常為人所請求。令受飲食衣被毳毼毳毼床褥綆縲病瘦湯藥諸生活具。
非不請求。

若我爾時知彼沙門是無著真人者。所獲福報當復轉倍。受大果報。極妙功德。明所徹照。極廣甚大。

於是。尊者阿那律陀無著真人逮正解脫。說此頌曰

我得識宿命 知本之所生 生三十三天 七反住於彼 [v. 4]
此七彼亦七 世受生十四 人間及天上 初不墮惡處 [v. 5]

『佛說古來世時經』(829c5-13):

吾因是德七反生天為諸天王。七反在世人中之尊。

因此一施。為諸國王長者人民群臣百官所見奉事。四輩弟子比丘比丘尼。清信士女所見供養。

衣被飲食床褥臥具病瘦醫藥。自來求吾。吾無所望。

初生在家為釋種子。諸藏踊出金銀珍寶不可勝計。及餘財物無能限者。

棄家損業行作沙門。假使爾時知其道人緣覺道成。廣大其心福不可量。

於是頌曰

便知本宿命 前世所更歷 在彼忉利天 受安則七反 [v.4]
於彼七此七 計終始十四 在天上世間 未曾至惡道 [v.5]

さて、完全には対応しない内容であることが確認できたが、§ 34 の場合と同様に Pūrvāparāntakasūtra 以外の文献からア Niluddha の事跡が混ぜ込まれた可能性もある。そこで他の資料でア Niluddha の事跡を少し辿って見よう。

2.3. 他文献に基づくア Niluddha の事跡

2.3.1. パーリ文献

ア Niluddha (阿那律) の過去物語はパーリ文献にも残っている。パーリではア Niluddha (Anuruddha) とされるが、彼に関する事跡は多岐に渡るため到底ここでその全てを扱うわけにはいかない。その点に関しては専門の研究等に譲り¹⁸、KV に引かれている内容だけに注目しよう。彼の前世における出来事の中で独覚に供養したという話を伝えているものは Theragāthā である。vv. 910-919 が Anuruddha (= Aniruddha) の偈となっており、漢訳仏典とは異なって非常に簡潔にその過去世における彼の事跡を伝えている。

Annabhāro pure āsiṃ daḷiddo ghāsahārako.
samaṇaṃ paṭipādesiṃ upariṭṭhaṃ yasassināṃ || 910
so 'mhi Sakyakule jāto Anuruddho 'ti maṃ vidū.
upeto naccagīṭhi sammatāḷappabodhano || 911
ath' addasāsiṃ sambuddhaṃ satthāraṃ akutobhayaṃ.
tasmim cittaṃ pasādetvā pabbajim anagāriyaṃ || 912
pubbenivāsaṃ jānāmi yattha me vusitaṃ pure.
Tāvatiṃsesu devesu atṭhāsiṃ sakkajātiyā || 913
sattakkhattuṃ manussindo ahaṃ rajjam akārayim.
cāturanto vijitāvi Jambusaṇḍassa issaro.
adaṇḍena asatthena dhammena anusāsayim || 914
ito satta ito satta saṃsārāni catuddasa.

¹⁸ 赤沼『印度佛教固有名詞辞典』 pp. 47-51; Malalasekera, DPPN. s.v. Anuruddha.

nivāsam abhijānissam devaloke t̥hito tadā || 915¹⁹

「かつて私はアンナパーラという貧しい飼い葉運搬人であった。ウパリッタという有名な沙門を供養したことがある[910]。

それ故私はシャカ族に生まれ、人々はアヌルッタという名で私を知るようになった。歌や踊りに耽り、銅鑼とシンバルで目を覚ました[911]。

そして完全に目覚めた人、何ものにも恐れぬ師を見、彼に浄心を向けて家なき状態へと入った[912]。

私はかつて暮らしていた前世を知る、それは三十三天にあってサッカとして生まれたのである[913]。

七度人間の王として国を統治し、全世界を支配し、ジャンプ洲の主として、警棒なく剣なく、法によって統治した[914]。

ここから七度、またここから七度と、十四回にわたって私はかつての暮らしを知った。そうしてその時神の世界にいた[915]。

パーリ文献と漢訳仏典との違いは彼の過去世における名前を一方は「アンナパーラ」とし他方は明示していない点くらいのもので、事情説明の詳しさが異なる点を除けば、大きな違いはないといってよい。つまり南伝であれ北伝であれ、阿那律が独覺に食事の供養をしたことで天と地上にそれぞれ七回生まれたこと、そして後に出家したこと（これは現在世のことか？）は共通に持たれていたことがはっきりしている。

以上の内容は KV で言及される内容にほぼ一致しているといえるのだが、KV の言及例の後半に挙げられている「王によって八つの村があたえられたこと」、「最後の貧乏生活」という内容が上記のパラレル文献には見当たらない。§ 34 の引用例で見たように、後者の事跡についてはその内容を推測することが可能である。従って、パラレル文献には見当たらない「八つの村を与えられた」という事跡は、少なくとも KV が典拠としたサンスクリット文献だけの伝承といえるのであろうか。

その点について『テラガター・アッタカター』には、アヌルッタが前世において王から報償を受け取った記事が残されており²⁰、また同様の内容は『ダンマパダ・

¹⁹ これについての注釈書は次のように解説する。 *Theragāthā Aṭṭhakathā* (Paramatthadīpanī V. vol. III, 1959 (rep. 1984), 72.20-27): On 910. *Annabhāro ti, evaṃnāmo purim'attabhāve. Ghāsahārako ti ghāsamattassa atthāya bhatim katvā jīvanako. Samaanā ti samitapāpaṃ. Paṭipādesin ti paṭimukho hurvā pādāsīm: pasādena abbimukho hurvā āhāradānaṃ adāsīn ti adhippāyo. Upariṭṭhan ti evaṇnāmakam paccekabuddham. Yasassinan ti kittimantaṃ patthaṭayasam. Imāya gāthāya yāva carim'attabhāvā ulārasampattibetubbūtaṃ attano pubbakammaṃ dasseti. tenāha so 'mbi Sakyakule jāto ti ādi. On 915. Ito sattā ti, ito manussalokato cavitvā devaloke dibbena ādbipaccena sattā. Tato sattā ti, tato devalokato cavitvā manussaloke cakkavattibhāvena sattā. saṃsārāni catuddasā ti, catuddasa bhavantarasaṃsaraṇāni. Nivāsam abhijānissan ti pubbenivāsam aññāsīm. Devaloke t̥hito tadā ti, taṃ ca kbo na imasmim yeva attabhāve., aha kbo yadā ito anantarātīte attabhāve devaloke t̥hito, tadā aññāsinti attho.*

²⁰ Cf. *Theragāthā-Aṭṭhakathā* (III.64.29-65.25): tena pasannacitto Sumanasēṭṭhi tassa sahasam datvā “ito paṭṭhāya tuyham sahatthena kammakaraṇakiccaṃ n' atthi, paṭirūpaṃ gehaṃ katvā vanijjena jīvāhi”ti āha (65.10-13) ... taṃ sutvā rājā tussitvā sahasam datvā “asukasmim nāma t̥hāne gehaṃ katvā vasā”ti gehaṭṭhānam āṇāpesi. tassa taṃ t̥hānaṃ sodhāpentassa mahantiyo nidhikumbhiyo uṭṭhahimsu. tā disvā so rañño ārocesi. rājā sabbam taṃ dhanam uddharāpetvā rāsikataṃ disvā “ettakam dhanam imasmim nagare kassa gehe atthi?”ti. “na kassaci, devā”ti. “tena hi ayam (Annabhāro imasmim nagare) Mahādhanasēṭṭhi nāma hotū”ti (taṃ divasam eva) tassa seṭṭhiṭṭhānaṃ ādāsi (65.19-25).

これ以外の言及に関する情報については前掲赤沼『辞典』s.v. Anuruddha; Malalasekara, do. を参照されたい。

アッタカター』にも挙げられている²¹。それら注釈書に書かれている内容を簡単にまとめておけば次のようである。彼はパドゥムツタラ仏の時代にある比丘が天眼第一であることを誇っていたことを聞き、自分もそうなりたいとの願いを持つ。そしてゴータマ仏の時代に彼の教えを聞いてアヌルッダという名の人物となり、天眼を得ることを授記される。さて彼はバラナシの貧しい一家に生まれ、スマナという人物の家で草刈りをする仕事をしていた。その為「アンナバーラ（飼い葉を運ぶ人）」と呼ばれていた。ある日ウパリッタという名の独覚がガンダマーダナで瞑想していた時、アンナバーラの親切心を見ようと考え、彼の前に現れた。アンナバーラは家に帰り、妻が自分たちの為に用意していた食事を持ってきて、ウパリッタに供養した。スマナは自分の日傘に宿る神からその話を聞き、アンナバーラを賞賛し取り立ててやった。また王もその出来事を聞き、多くの財を与え商人の地位 (Mahādhānasetṭhi) に就けてやった。

パーリの注釈書と KV とで異なる点は幾つかある。例えば、独覚ウパーリシュタに供養した場所が前者ではバラナシであるのに対して後者はラージャ・グリハであること、七度ずつの転生があったかどうか、供養した食事の内容である。しかしこうした違いより、王によって報償を与えられたという共通点が見出せたことの方が重要である。何故なら、そのことによって KV で言及されたアヌルッダの事跡が孤立したものではなく、Pūrvāparāntakasūtra の対応漢訳に存在しなくとも、別のソースから持ち込まれた可能性が出てくるからである。

2.3.2. 漢訳文献

ここでは漢訳から阿那律の事跡を辿ろう。但し、KV に言及する範囲での事跡を記述している文献のみに限ることとする。

先ず、貧乏生活をしていた頃に独覚に食事を供養したこと、七回ずつの生まれ変わりで王となったことは以下に述べられている²²。

『佛五百弟子自説本起經』(T 199, vol. 4, 198c):

昔我曾不食	彼世時施與	遭遇見沙門	大通和苾芻 [v.1]
以故生釋種	號曰阿那律	[v.2ab]	
自識本宿命	造行所更歷	於叨利天上	積七世在彼 [v.5]
七返還人間	人間轉勢尊	富貴君子家	金珠寶自然 [v.6]
於是七彼七	生死凡十四	本悉識知之	前世之所行 [v.7]

²¹ *Dhammapada-Atṭhakathā* (on Sumanasāmaṇeravattu, IV. 120.19-123.18).

²² 対応するサンスクリットテキストである *Anavataptagāthā* にはこのアヌルッダの節は失われている (Bechert 1961: 170-74 参照)。漢訳の対応等については Kudo 2004a: “Annotations” Note 50, 274-75; Note 64, 300-1 参照のこと。また、ここに挙げた箇所とパラレルになる内容が AKBh に見出せる: *yat tarhi sthavīrāniruddhenoktaṃ — so ’haṃ tasyaikaṇḍapātasya vipākena saptakṛtvā trayastriṃśeṣu deveṣūpapanno yāvād etarhy ādye śākyakule jāta — iti* (258, 14-15)。この言及では途中で省略された部分があるが、明らかに『説本經』或いは『古來世時經』の一節と対応している。対応漢訳では次のように Skt. 文では省略された部分が残されている: 『阿毘達磨俱舍論』卷第十七「分別業品第四之五」(T 1558, vol. 29, 92a26-29): 「尊者無滅自言。我憶昔於一時於殊勝福田一施食異熟便得七返生三十三天。七生人中爲轉輪聖諦。最後生在大釋迦家豐足珍財多受快樂」。尚、この部分に対する Yaśomitra 註ではこの食事の供養をした独覚の名は *Tagaraśikhin* である (上記注 7 参照)。諸經論に引用されたと思われる『説本經』については寺岡 1986: 94-96 参照のこと。但し、後で見るように引用或いは言及に際してその出典名を『説本經』とするものは存在しない。

『根本説一切有部毘奈耶藥事』卷第十七(T 1448, vol. 24, 86b-c):
 我先無攝録 貧窮負草活 歸投備名稱 奉覲大沙門 [v.1]
 今生釋迦種 名阿泥嚩駄 [v.2ab]
 於三十三天 七返而受生 七返生人趣 亦為作人主 [v.6]
 灌頂利帝利 獨化於臚部 彼七此亦七 輪迴十四返 [v.7]

阿那律の事跡を纏めた上記の資料には「飢饉の際に世尊が五百人の比丘を阿那律に預けたこと」は見出せないが、その出来事は筆者が確認できた範囲では次の漢訳文献に残されている。

『佛本行集經』卷第六十「摩尼婁陀品」(T 190, vol. 3, 928a20-b15):

汝諸比丘。摩尼婁陀。昔有如是種種善根。由彼業力。今得出家。受具足戒得羅漢果。汝諸比丘。我復授記。於我聲聞弟子之中。摩尼婁陀。最為第一。

復有一時。世尊在於波羅奈城舊仙居處鹿野苑中。彼時天雨。長老阿難。詣向佛所。頂禮佛足。卻住一面。住一面已。白言。「世尊。今日天雨。無有飲食。當作何計。令諸比丘。過一日一夜。」

佛告阿難。「汝莫愁也。摩尼婁陀比丘。現在福力甚強。今日比丘應當得過一日一夜」

(928b)爾時長老摩尼婁陀。詣向佛所。到已頂禮。卻住一面而白佛言。「世尊。今者受我微供。

若食我食。堪令一切諸比丘等過一日一夜。」

於時世尊。默然受許。

爾時長老摩尼婁陀。於晨朝時。著衣持鉢。往至入彼波羅奈城。其入城已。未曾告乞。亦更無有親舊識知。當於爾時。忽然即有五百釜食。來至彼前爾時長老摩尼婁陀。尋時送彼五百釜食。向鹿苑中。即敷諸座。敷設已訖。往白佛言。「世尊時至。飯食已辦。唯願就食」

爾時世尊。日在東方。著衣持鉢。共諸比丘。來至食堂。於所敷設。次第而坐。爾時長老摩尼婁陀。見佛及僧次第坐已。奉持如上五百釜食。施佛及僧。悉飽滿已。然後自食飯食亦訖。共諸比丘。詣向講堂。敷座而坐

更にもう一つの事跡「王から報償として村を貰った」ということは、また別の文献に見出すことが出来た。それは阿那律が独覚に食事の供養をした後で、その独覚が神通力を発揮し、白骨を金へと変え、それを獲得した阿那律は王に献上するという挿話を物語る文献である。この話を伝えるものに二つの資料があるが、一つは先に引用した『佛本行集經』であり、もう一つは『雜寶藏經』である²³。特に取り上げたいのは後者である。

『雜寶藏經』卷第四「(五〇)大愛道施佛金縷織成衣并穿珠師緣」(T 203, vol. 4, 470a14-471a25, esp. 470c29-471a25):

時賣薪人。即便(471a)授與。辟支佛受而食之。食訖之後。飛騰虛空。作十八變。即還所止。即還所止。

時賣薪人。後更取薪。道見一兔。以杖撩之。變成死人。卒起而來。抱取薪人項。彼取薪人。種種方便。欲推令去。不能得離。脫衣雇人。使挽卻之。亦不得離。展轉至闍。負來向家。既到家中。死人自解。墮在於地。作真金人。

時賣薪人。即便截卻金人之頭。頭尋還生。卻其手脚。手脚還生。須臾之間。金頭金手滿其屋裏。積為大積。鄰比告官。「此貧窮人。屋裏自然。有此金積。」

王聞遣使。往覆檢之。即到屋裏。純見爛臭死人手頭其人自捉金頭。來以上王。便是真金。

王大歡喜。此是福人。即封聚落。

從是命終。生第二天。為天帝釋。下生人中。為轉輪聖王。天王人王。九十一劫。不曾斷絕。今最後身。生於釋種。

²³ Cf. Kudo 2004a: "Annotations" Note 64, 302-3.

最後に書かれているように（「王大歡喜。此是福人。即封聚落」）、「王から八つの村を与えられた」という事跡に近い内容が述べられている。勿論この文献が KV の直接のソースであったわけではないだろうが、こうした説話系の資料に残っているということは、食事の供養がどのような果報をもたらすかを様々な形で説く中で、おそらくは単純には「食事の供養→衣食に不自由しない」という業報がその事例を帰せられた人物自身の事跡と相まって、より膨れあがった内容になったのではないかと思われる。

2.4. 小結

以上、僅かな資料ではあるが、他文献でのア Niludda の事跡を辿ってみた。その結果、KV に記述される彼の事跡、即ち「ウパーリシュタ独覚に食事の供養をしたこと」、「そのことによって王から八つの村を与えられたこと」、「それが最後の貧乏暮らしとなったこと」、「それぞれ七回に渡って天上界と地上の王となったこと」、「衣食住に何ら不自由の無い生活を送ったこと」、「飢饉の際、世尊は五百人の僧を彼に預け、彼は全員に食事を与えたこと」の全ては、その典拠を明示される *Pūrvāparāntakasūtra* だけでは見出せなかった。しかし、ア Niludda のことを記述する他の資料にはそうした内容にほぼ相当する内容が見出せた。このことは、何度も繰り返すことになるが、KV に言及される文献と実際に対応する文献との違いを反映しており、KV が多種多様な文献から構成されていることを裏付ける。KV に引用或いは言及される文献はあくまでも業報を例証する一つの代表的な典拠として明示されていて、実際 KV テキストに残る種々の事跡は更に多くの資料を背景に語られているケースが多い、と言ってよいだろう。勿論、KV が現存する資料と対応しない部分を有する未知の文献（未知のヴァージョン）を典拠にしていた可能性はあるが、その場合でも KV が多様な文献を背景に拡大展開したことに変わりはない。

【二つの対応漢訳について】

ここで問題にした『中阿含經』『説本經』と『佛説古來世時經』の関係に関して、両者の関係をまとめておく。

『中阿含經』は知られているように、二度漢訳されており、現存するものは第二訳である。水野弘元博士は『中阿含經』と『増壹阿含經』の漢訳問題を論じ、両者が共に僧伽提婆によって改訳されたもので、曇摩難提の初訳の一部が実は単行經典として大藏經中に残っていることを明らかにした。そして『經律異相』に「中阿含經」からの引用とされる五つの物語が曇摩難提の訳になるものであると結論している。この五つの物語には KV の対応漢訳の一つ「鸚鵡經」からの引用とされるものだけでなく、今問題にしている阿那律の前世物語も含まれている²⁴。

前者の事例については、『中阿含經』『鸚鵡經』と『佛説鸚鵡經』(T 79)、そして『經律異相』引用文を抜粋対照して相互の親近性を指摘した。その考察によれば、『經律異相』引用文は『佛説鸚鵡經』に類似していることが明白であり、それ故『佛説鸚鵡經』は失われた「中阿含經」第一訳から単行經典として生き残ったものであると結論するのが適当であろう。従って、「鸚鵡經類」第一類に属する漢訳經典の

²⁴ 水野 1989 [1996] 参照のこと。その論旨は簡単に工藤 2005 に扱った。

うち、『佛説兜調經』、『中阿含』「鸚鵡經」、『佛説鸚鵡經』は全てが「中阿含經」の異訳であると推定される。また水野博士による検討でも『經律異相』に引用される他の物語は現存『中阿含經』の対応經典の文章とは相違している。

しかし、今問題にしている「説本經」の異訳である『古來世時經』については、阿那律の前世物語が第一訳「中阿含經」から生き残ったものとの指摘だけで、その具体的な比較は為されていない。そこで KV に引用される阿那律の事跡に関わる問題として、ここで三者の比較対照を行い、「鸚鵡經」のケースと同様であるのかどうかを検討しよう。水野博士の提示の仕方に従って、引用文を分節した上で、

- A 『經律異相』卷十三「阿那律前生貧窮施緣覺食七生得道」(T 2121, vol. 53, 68a28-b15);
- B 『中阿含經』「説本經」;
- C 『佛説古來世時經』.

の順で掲げる²⁵。尚、一部は省略したが、その部分は +++ によって表した。

- A: 佛在鹿野苑中。
- B: 我聞如是。一時。佛遊波羅奈。在仙人住處鹿野園中。+++
- C: 聞如是。一時佛遊波羅奈仙人鹿處。

- A: 阿那律語諸比丘。我念過去。在此波羅奈為貧窮人。客作荷擔以自存言。時世穀貴飢餓多有終者。乞食難得。
- B: 尊者阿那律陀告諸比丘。+++ 我憶昔時在此波羅奈國為貧窮人。唯仰拈拾客擔生活。是時。此波羅奈國災旱早霜蟲蟻不熟。人民荒儉。乞求難得。
- C: 於時賢者阿難律在彼會中。聞說法言。答報之曰。+++ 憶念吾昔在波羅奈國。穀米踊貴人民飢饉。我負擔草賣以自活。

- A: 有辟支佛。名披栗吒。亦依此住。
- B: 是時。有一辟支佛。名曰無患。依此波羅奈住。
- C: 彼有緣覺名曰和里。來遊其國。

- A: 時辟支佛早起乞食。時我早起出欲荷擔。見辟支佛。我荷擔還又復見之。
- B: 於是。無患辟支佛過夜平旦著衣持鉢。入波羅奈而行乞食。我於爾時為拈拾故。早出波羅奈。諸賢。我登出時。逢見無患辟支佛入彼。時。無患辟支佛持淨鉢入。如本淨鉢出。諸賢。我時拈還入波羅奈。復見無患辟支佛出。彼見我已。
- C: 爾時緣覺著衣持鉢入城分衛。中道吾負草還於城門中。復與相遇空鉢而出。和里緣覺遙見吾來。

- A: 便作是念。是人早起時我見之。今又見出必未得食。
- B: 便作是念。我旦入時。見此人出。我今還出。復見此人入。此人或能未得食也。我今寧可隨此人去。
- C: 即自念言。吾早入城此人出城。今負草還。想朝未食。吾當隨後往詣其家。

- A: 便隨我後至于我家。即作此念。意欲請之。
- B: 時。辟支佛便追尋我。如影隨形。諸賢。我持拈還到家。捨擔而迴顧視。便見無患辟支佛來追尋我後。如影隨形。我見彼已。便作是念。『我旦出時。見此仙人入城乞食。今此仙人或未得食。我寧可自闕己食。分與此仙人。』作是念已。
- C: 我時擔草自還其舍下草著地。顧見緣覺追吾之後如影隨形。我時心念。朝出城時見此緣覺入

²⁵ また『法苑珠林』卷第五十(T 53, No. 2122, 664a1-20)にも『佛説古來世時經』からの引用が見られるが、ほぼ同経と一致する。

城分衛。而空鉢還。想未獲食。吾當斷食以奉施之。

- A: 即便分食持至其所。到已語言仙人。「此是我分。當慈愍我故納此食。」
 B: 即持食分與辟支佛。白曰。「仙人。當知此食是我已分。為慈愍故。願哀受之。」
 C: 即持食出長跪授之。「身安隱具。願上道人愍傷受之。」
- A: 時辟支佛以鉢受半。「汝自食半可為俱足。」
 B: 時。辟支佛即答我曰。「居士。當知今年災旱早霜蟲蟻。五穀不熟。人民荒儉。乞求難得。汝可減半著我鉢中。汝自食半。俱得存命。如是者好。」
 C: 時緣覺曰。「穀米飢貴人民虛饑。分為二分。一分著鉢一分自食。爾為應法耳。」
- A: 答言。「仙人。我有家居得隨時食。汝仙人見慈盡受此施。此辟支佛以慈愍故。而盡受之。」
 B: 我復白曰。「仙人。當知我在居家自有釜窖有樵薪有穀米。飲食早晚亦無時節。仙人。當為慈愍我故。盡受此食。時。辟支佛為慈愍故。便盡受之。」
 C: 身報之曰。「唯然聖人白衣居家。炊作器物食具有耳。徐炊食之早晚無在。道人願受加哀一門。時彼緣覺悉受飯食。」
- A: 我因此施七生天上。得為天王。七生人間亦為人王。
 B: 諸賢。我因施彼一鉢食福。七反生天。得為天王。七反生人。復為人王。
 C: 吾因是德七反生天為諸天王。七反在世人中之尊。
- A: 今生釋種財富無量。棄此出家學道得證（出中阿含經第十二卷）
 B: 諸賢。我因施彼一鉢食福。得生如此釋種族中。大富豐饒。多諸畜牧。封戶。食邑。資財無量。珍寶具足。+++於是。尊者阿那律陀無著真人逮正解脫。
 C: 初生在家為釋種子。諸藏踊出金銀珍寶不可勝計。及餘財物無能限者。棄家損業行作沙門。假使爾時知其道人緣覺道成。廣大其心福不可量。

こうしてみると、『經律異相』引用文は明らかに現行『中阿含經』と異なっているが、更に単行經典である『佛說古來世時經』とも相違している。「鸚鵡經」のケースのように『經律異相』引用文が初訳「中阿含經」の一部である可能性が他にも存在することを考慮しても、『佛說古來世時經』は「聞如是。一時佛遊波羅奈仙人鹿處。爾時．．．佛說是時莫不歡喜」という冒頭と末尾を持ち²⁶、例えば水野博士が指摘したような曇摩難提訳の特徴（「聞如是一時薄伽婆在．．．彼時．．．聞世尊所說、歡喜而樂」）を持っていない。すると、『佛說古來世時經』は『中阿含經』の第一訳とも第二訳とも異なる伝承を承けている異訳であると言わざるをえない。

経録では『古來世時經』は全て失譯とされていて、例えば『出三藏記集』では「闕經」の中に「古來經一卷」があるが、『開元釋教錄』卷第五(T 2154, 55, 534b)には「古來經一卷(今疑是藏中古來世時經)」とある。その後の法經『衆經目錄』卷第三(T 2146, vol. 55, 129c)では「古來世時經一卷(出第十三卷)」は「中阿含別品異譯」である。また『開元釋教錄』卷第十三も同じ扱いである²⁷。

²⁶ 「佛說是時莫不歡喜」という末尾を有する經典は他に、『生經』卷第二、竺法護譯「佛說剪髮經」第十二(T 154, vol. 3, 78b5-79a28)（冒頭は「聞如是。一時佛遊舍衛國祇樹給孤獨園。」）、『法句譬喻經』卷第一「華香品第十二」(T 211, vol. 4, 584b25-585a8)（冒頭は「昔佛在舍衛國。」）、『佛說龍施女經』支謙譯(T 557 [= No. 558], vol. 14, 909c6-910a24)にある（冒頭は「聞如是。一時佛遊於維耶離奈氏樹園。」）。

²⁷ T 2154, vol. 54, 612a: 「古來世時經一卷 失譯今附東晉錄 右出中阿含經第十三卷。與說本經同本異譯（比於本經此文稍略）」、『貞元新定釋教目錄』卷第二十三(T 2157, vol. 55, 945b5-7)も同様。

また、『説本經』と『古來世時經』が他文献に引用されているかどうかを、漢訳經典で確認すると、『説本經』という名を明記した引用はただの一つもない。後者の名前は『法苑珠林』における引用に見られる（その箇所は上記で検討したところである。内容は現存する『古來世時經』と一致する）。他方、内容的にこれらの經典を引いている、或いは言及していると思われる例も存在するが、例えば『大智度論』では「本末經」、弥勒經典類では「前後經」という名で見出される²⁸。確かに梵語名 *Pūrva-aparāntaka-sūtra* から見ると、*pūrva(-anta)* / *apara(-anta)* がそれぞれ「本・末」、「前・後」と訳されたものとして經典名は対応しているといつてよい。しかし、漢訳の諸經録を見ると、「本末經」或いは「前後經」という名は一切見出せない。つまり、現存する經典名である『説本經』・『古來世時經』という名での引用は無い代わりに、經録には残っていない「本末經」・「前後經」という名での引用或いは言及が存在していることになる。このことは果たして、『經律異相』引用文が經録にない經典名のテキストから引かれたことを示唆しているのかどうか。

サンスクリット文献で言及されているのは、筆者が知る限りでは『マイトレーヤ・ヴァーカラナ』(*Maitreya-vyākaraṇa*)だけであり、チベット文献でもシャマタデーヴァの『俱舍論註』(*Abhidharmakośa-Upāyikā*)だけである²⁹。前者ではネパール写本の読みが“*sūtre pūrvāparāntike*”とあり（対応チベット訳では“*Sngon dang phyi mtha'i mdo*”で“*Pūrv-a-apara-anta-sūtra*”となる）、これは韻文に現れることを考慮すれば“*Pūrvāparāntikasūtra*”と呼ばれていたと理解出来る³⁰。後者では“*Sngon gyi mtha' dang phyi ma'i mtha'i mdo*”とあり、“*Pūrva-anta-apara-anta-sūtra*”に戻すことが出来る。従って、KVに現れる經典名は梵蔵資料ではほぼ対応が確認できる。

さて、いずれにせよここで比較対照した三種の文献は相互に異訳の関係に立つことになる。それは丁度「鸚鵡經類」で『兜調經』、『中阿含經』「鸚鵡經」、『佛説鸚鵡經』が全て「中阿含經」の異訳であるが、その伝承された時期や地域による違いを反映した発展段階の異なるものであったのと同じような関係にあるのかも知れない。KVには幾つかの伝承の異なる文献が言及されていることになるが、依然としてKVにうまく対応する資料というのは見出せないことになる。

4. Devatāsūtra

²⁸ 寺岡 1986: 100 参照。

²⁹ この点については本庄 1983: 66-67 [34]、それに基づく寺岡 1986: 90, 100-101、或いは Skilling 1997: 283 (10) 参照。『マイトレーヤ・ヴァーカラナ』に言及される「前後經」が『中阿含』「説本經」に対応することについては、石上 1994: 1067 にも指摘されている。

³⁰ この文献のサンスクリットテキストは Lévi “*Maitreya et consolateur*” (1932) にあるが、彼が用いたネパール写本（コルカタ、アジア協会所蔵）は第25偈abまでを欠く。その為、「説本經」の名が現れる第2偈は対応するチベット訳の“*Sñon dan phy mtha'hi mdo*”から復元して“*Pūrvāparāntasūtra*”とされている（Lévi, op. cit. p. 362）。他方、ギルギットから見出された写本(folio nos. 1536-1542)にもこのテキストがあるが、これも冒頭の第30偈までも欠き、校訂者である Majunder 1959 (*Ārya-Maitreya-Vyākaraṇa*. Calcutta, 1959) は当該箇所をチベット訳からの還梵(“*sūtrāntare purā'khyātam*,” p. 3)を挙げているだけである。その後、石上 1989 はネパール写本に完本となるものを見出し、そのテキストを公表した（但し、それは暫定的なものとして提示されている）。この写本はネパール国立古文書館に保存されているもので (Ms. No. 5. 189)、それを再度読み直すと本稿で挙げたものが確認出来る（尚、石上 1989: 297 では“*sūtrapūrvāparāntike*”と読んでいる）。

この経典は § 66, 70 に引用される。前者での引用に際して写本Aはその文献名を特定しないものの、写本Bでは *Devatāsūtra* とある。後者の例では両写本共に文献名を出す。

4.1. 引用箇所

4.1.1. § 66

第一例は § 66 「衣服を施与することの十の功德」の例証である。十種の功德の異同について言えば、写本Aの第1「皮膚が白く」(*śukla-cchavir*)が写本Bには無く、その代わり写本Bは第4番目に「見た目に美しい」(*priyadarśana*)が加えられている。従って、数の上では共に十となる。

§ 66. 89.5-6 [TEXT: 186-87]; A53v.3-4; B31r.6.

yathā coktaṃ Bhagavatā Devatāsūtre |

“vastraprado bhavati varṇṇavān* ||”

「例えば世尊が『デーヴァター・スートラ』で説く（が如し）。

『衣服を施与する人は妙色となる』」

写本Aでは経典名が特定されていないが、おそらくはハプログラフィーによる脱落であろうと思われる (*Bhagavatā (Devatā)sūtre*)。

4.1.2. § 70

第二例が現れる § 70 は「乗り物を施与することの十の功德」を列挙し、二種の文献を引用する。一つがこの *Devatāsūtra* であり、他方は *Cakravartisūtra* である³¹。両写本とも九つの功德だけしか挙げていないが、伝承の異なるもう一つの KV写本である写本Cでは第4「敵は多くない」(*na ca bahumitro bhavati*)の前に「安楽となる」(*sukihito bhavati*)を含む。またAB写本で「道を行くことの疲労がない」(*mārgaklamona bhavati*)とあるものがC写本では「徒歩で行く者でも疲労しない」(*padbhyāṃ gacchato na klāmyati*)とあり、またAB写本にある第8「大金持ちになる」(*mahābhogo bhavati*)の代わりに「従者に不自由しない」(*upasthāyakair avakailyaṃ*)となる。これらの功德の違いは或る意味で伝承の違いを反映しているようである。

§ 70. 94.6-7 [TEXT: 192-93]; A55r.4; B32r.5.

yathā coktaṃ Devatāsūtre |

“yānadaḥ sukhito bhavati yo dadāty upānahau |”

「例えば世尊が『デーヴァター・スートラ』で説く（が如し）。

『乗物を施与する人は安楽になる。履物を施与する者も（同様である）』」

いずれの引用も韻文と思える文章になっているが、前後の脈絡が正確にはとれないので、どのようなタイプの韻文かはわからない。

4.2. 対応文献

³¹ この経典については前注3参照。引用に際して挙げられる経典名は、写本Aでは “*Abhidharma Cakravartisūtre*” とあり、写本Bでは “*(Cakra)vattisūtre*” とある。

Devatāsūtra という名を冠する経典はサンスクリット本とチベット訳、そして漢訳が現存している。しかもそれらは徐々に展開してきたこの経典のそれぞれ異なった段階を体現していることが明らかにされている。以下に挙げる資料は後述する Mette、榎本文雄、松村恒各博士の研究に基づき、その後利用できるようになった幾つかの資料を加えたものである。

Skt.: Devatāsūtra

Gilgit Ms. Serial No. 13 (1542.5-1545.3) [Mette 1981; 修正：松村 1982, 1983].

Tib. Narthang No. 314 (La 405b6-408a2); Lhasa 333 (La 393b1-395b4); Derge 329 (Sa 257a7-258b7); Cone 968 (Sa 309b6-311a7); Peking 995 (Śu 256a7-267a5); sTog Palace 148 (vol. 67, mdo MA, 291b4-293b2); Phug bdag 134 (#864. 55A-55C/61. vol. 65, Na, 325b4-327b5); Phug bdag 278 (#885. 10B-10D/72./ vol. 85, Ku, 56 α a5-56 β -57a5) [see 松村 1982: 986, fn. 4].

漢訳：『天請問經』(T 592, vol. 15, 124b9-125a7).

『雜阿含經』第一二九一經 (T99(1291), vol. 2, 355c19-356a8).

『別譯雜阿含經』第二八九經 (T 100(289), vol. 2, 474b8-25).

直接の資料は以上であるが、それら以外にもこの経典の一連の展開の中に位置づけられる関連資料があって、実は KV に引用される偈に対応するものは関連資料の方にのみ見出される。

敦煌写本中の蔵訳本：Pelliot tibétain 103, 731, 732 [see Mette 1981: 139, fn. 2; 榎本 1982: 398-6].

Ratnāvadānamālā Ch. 8: *Devatāpariprcchāsūtra*.

SN, I. 5.2: *Kimḍadasuttam*, (SN, I. 32).

『雜阿含經』第九九八經 (T 99(998), vol. 2, 261b17-c4).

『別譯雜阿含經』第一三五經 (T 100(135), vol. 2, 426b27-c13).

上記の諸資料間の関係は榎本 1982b によって明らかにされており、ここでは博士の成果を基にこの文献の相互関係についての概略をまとめておこう。

この経典の梵本は Mette (1981) によってギルギット写本 No. 13 の中、1542.5-1545.3 に残されていることが確認され(続く 1545.3-8 には *Alpadevatāsūtra* が筆写されている)、Mette は蔵訳と対照し独訳を付して発表した。漢訳との対応は同論文140頁の注5に玄奘訳『天請問經』(T 592, vol. 2, 124b9-125a7) を挙げるに留まり、具体的な検討は行われていない。

この Mette のテキストに対して松村博士が読みの訂正と漢訳との対照を行い、梵・蔵・漢相互の韻文の順序について論じた(松村 1982)。博士は経典の構成の面から本来あったであろう韻文の順序を復元し、発展段階の一端を明らかにしている。それによれば、偈の順序に関しては漢訳が本来のものを保持しており、梵・蔵で問答形式の整合性を図る為に一部順序が入れ替えられ、蔵本には更に梵・漢本にはない偈が挿入されたのであるという。

松村博士のこの論文を受けて発表されたものが榎本 (1982b) である。榎本博士は主に松村博士の成果に基づいて、この経典の発展段階を次のように考えている：漢訳の元となった梵本 (C本。榎本論文による略号。以下同) に二偈が加えられたものが現行梵本 (G本) の原型となり、その韻文の順序がかなり入れ替えられたものが現在のG本であり、更に二偈付け加えられたものが蔵本の元となったT本である。

更に榎本博士は上記の伝承以外の文献の存在、即ち現存の T 本とは異なるテキス

トが敦煌写本中の蔵訳本にも存在し、また、*Ratnāvadānamālā* ch. 8: *Devatāparipṛcchāsūtra* にも T 本に相当するものが丸ごと引用され、CGT 本には存在しない多くの偈が含まれていることを明らかにした。そしてその両者には KV に引用されている偈が含まれているのである。(榎本 1982b: 398)

榎本博士は梵本(ギルギット写本)や漢訳『雑阿含經』所収の經典よりも更に増広された *Devatāsūtra* が転用されて Rv ch. 8 の元になったものと考えている。言い換えれば、KVに見出される引用は Rv が基にしたような、より発展した形のものからであったことになる。

4.3. 対応関係

では具体的にどのように対応しているかを見ていこう。

KV § 66: *vastraprado bhavati varṇṇavān.*

KV § 70: *yānadaḥ sukhito bhavati yo dadāty upānahau |*

Ratnāvadānamālā, VIII: *Devatāparipṛcchāsūtra*, v. 48 (Takahata ed., p. 100)³²:

annado balavān bhogī vastradaḥ śobhito bhavet |

pānadaḥ sukhitaḥ [< yānadaḥ sukhito?] tṛptaś cakṣumān bhavati dipadaḥ || 48 ||

MSS³³:

Matsunami 27, 54a7-b1:

annado balavān bhogī [> bhogī] vastradaḥ śobhito bhavet |*

pānadaḥ sukhitaḥ tṛptaḥ cakṣumān bhavati dipadaḥ |

Bendall Add. 1620, 61b8:

annado balavān bhogī vastradaḥ { | } śobhito bhavet |*

pānadaḥ sukhitaḥ tṛptaś cakṣumān bhavati dipadaḥ |

MBB-II-23, 79b6-80a1:

annado balavān bhogī vastradaḥ { { | | } } śobhito bhavet ||*

pānadaḥ sukhitaḥ tṛptaś cakṣumān bhavati dipadaḥ ||

それぞれの施与によってどのような結果がもたらされるのかという内容に関してはほぼ対応するが、逐語的には一致しない。具体的には、KV にある「履物云々」という内容に対応する箇所は Rv には見当たらず、また特に注目すべきは「乗物」(yāna)ではなく、「飲物」(pāna)の施与が述べられている点である。高島本で用いら

³² 高島が用いた写本は京都大学所蔵の2写本(A = Goshima/Noguchi No. 88 [chs.1-12]; A' = Goshima/Noguchi No. 87 [chs. 13-38])、榊亮三郎個人蔵写本(B)、パリ国立図書館所蔵写本(P = Filliozat nos. 104-105 [34 chs.])である。(第1章に関しては更に一つの写本と編者不明の出版テキストを用いているが、我々が問題としている章ではないのでここでは用いない。詳細は高島による序論を参照されたい。)

³³ ここでは当該箇所を有する写本のうち、高島本で用いられていない写本、即ち東京大学写本(Matsunami No. 26)、世界宗教研究所(The Institute for Advanced Studies of World Religions)からマイクロフィッシュで刊行されているネパール写本(“*Devatāparipṛcchāsūtra*”),そしてケンブリッジ大学所蔵写本(Bendall Add. 1620)を用いた。関連する写本の情報については岡野潔博士によるインターネット上に公開されている『インド仏教文学研究史9: 中世の Avadāna 文献の研究史と写本』B-5 (<http://member.nifty.ne.jp/OKANOKIYOSHI/medieval-avadana-index.html>)を参照されたい。

れた写本には *yānadaḥ* という読みを示したものはなく、高島本で用いられていない3種の写本でも全てが *pānadaḥ* とあり、Rv の読みは一貫して *pānadaḥ* であったと考えてよいだろう。このような違いは *ya-* と *pa-* の誤写に由来する可能性も考えられるが、元々 *yāna-* であったものが *pāna-* に読み替えられたか或いはその逆であったかははっきりしない（後述するように、パーリとの対応から本来は *yāna* であって、単なる誤写によるか「食物の施与」との関連から *pāna* に読み替えられた可能性の方が高そうである）。

このように部分的な引用ではあるが、*Devatāsūtra* のより発展した形態を示したテキストを反映するものでありながら、KV と Rv とは異なったテキストに基づいていた可能性が高い。

他方、Lévi (1932: 94, fn. 5) と榎本 (1982b: 398) が指摘するように、より逐語的な対応を見せる文献がある。それは『雑阿含經』・『別譯雜阿含經』、SN に含まれる以下の文献である。いずれも何を布施することによって、例えば力・妙色を得るのかという問いに対する世尊の答の部分に対応している。

SN, I. 5.2: *Kimḍadasuttaṃ* (I. 32):

*annado balado hoti, vatthado hoti vaṇṇado.*³⁴
yānado sukhado hoti, dīpado hoti cakkhudo ||
so ca sabbadado hoti, yo dadāti upassayaṃ.
amataṃ dado ca so hoti, yo dhammam anusāsati ||

『雑阿含經』卷第三十六・第九九八經 (T 99(998), vol. 2, 261b25-29):

爾時。世尊說偈答言

施食得大力	施衣得妙色
施乘得安樂	施燈得明目
虛館以待賓	是名一切施
以法而誨彼	是則施甘露

『別譯雜阿含經』卷第八・第一三五經 (T 100(135), vol. 2, 426c5-9):

爾時世尊以偈答曰

施飲食得力	施衣得盛色
施乘得安樂	燈明得淨目
屋宅一切施	如法教弟子
能作如是施	是名施甘露

KV 引用文に対応する部分だけを対照してみると以下ようになる。

KV: *vastraprado bhavati varṇṇavān.*

Rv.: *vastradaḥ śobhito bhavet.*

SN: *vatthado hoti vaṇṇado.*

『雑』: 施衣得妙色

『別』: 施衣得盛色

³⁴ Cf. SN-*Aṭṭakathā* (*Kimḍadasutta-vaṇṇanā*) [I, 85]: "*vatthado*" *ti. yasmā surūpo pi ducchoḷo vā acoḷo vā virūpo hoti obhīto duddasiko, vatthacchanno devaputto viya sobhati, tasmā "vatthado hoti vaṇṇado" ti āba.*

KV: yānadaḥ sukhito bhavati.
 Rv.: pānadaḥ (yānadaḥ?) sukhitaḥ.
 SN: yānado sukhado hoti.
 『雜』: 施乗得安樂
 『別』: 施乗得安樂

KV: yo dadāty upānahau.
 Rv.: x
 SN: yo dadāti upassayaṃ.
 『雜』: 虚館以待賓
 『別』: 屋宅一切施

KV における引用は節のテーマに沿った内容を元の文献から部分的に引いたものであると思われるから、順序が一致しないことはさほど不思議ではない。Rv が有する「飲物の施与」という項目はパーリ、漢訳共になく、このことは Rv の伝承の過程で読み替えられたものであることは確実であろう。

さて、KV だけが「履物」(upānah)という布施物をあげるが、これはパーリの upassaya に対応すべき部分が誤読されたか、或いは伝承を別にしている部分ではないかと思われる。パーリ、漢訳とも乗物の施与に引き続いて「避難所」(Pāli: upassaya; Chs.: 虚館・屋宅)とあり、更に Pāli SN-*Aṭṭhakathā* によれば次のように履物を乗物の施与の中に入れており、履物の施与を別に立てることが元々は存在しなかったことが分かる。

SN-*Aṭṭhakathā*. (*Kimḍadasutta-vaṇṇanā*) [vol. I, 83]:

"yānado" ti hatthiyānādinam dāyako. tesu pana —

"na hatthiyānam samaṇassa kappati,

na assayānam, na rathena yātum.

idañ ca yānam samaṇassa kappati,

upāhanā rakkhato silakhandhan" ti ||

tasmā chatupāhanakattarayaṭṭhimañcapīṭhānam dāyako, yo ca maggam sodheti, nisseṇim karoti, setum karoti, nāvaṃ paṭiyādeti, sabbopi yānadova hoti

(「乗物の施与者」とは。象の乗物等を施与する者ということである。それについてまた(次のようにも言われている) —

「象の乗物はサマナには相応しくない。

馬の乗物も、車に乗っていくことも(相応しくない)。

この乗物こそがサマナには相応しい。

(即ち)靴によって戒蘊が守られる」

それ故、「乗物を施与する人」とは傘蓋、靴、杖、ベッド、椅子を与える人のことであり、道を清掃する、梯子を掛ける、橋を架ける、船を用意する人のことであり、要するに移動手段を用意する人のことである。)

Rv に見出される一節との対応で述べたように、KV には「施飲物」ではなく「施乗」が挙げられている点、他方「履物」もしくは「避難所」の施与についての記述が Rv には含まれていない点を考慮すると、KV が「『デーヴァター・スートラ』において説かれている」と出典元を明記する文献は上記の『雑阿含經』等に対応する経典をほぼ丸ごと含めた、更にそれより拡大された Devatāsūtra であると考えてよいだろう。それは Rv に残る Devatāsūtra の発展したテキストとは異なった伝承を反映

したものであろう。

4.4. 小結

二度にわたって言及される經典としては全体像が見えない部分的な引用ではあるが、KV における引用は原文の一部をそのまま引用したものであって取意引用ではないと言える³⁵。そして現在までに知られている Devatāsūtra には含まれていない文を同名の經典からの引用とすることから、KV は現時点では原文が回収されていないが嘗ては存在した、より増広された Devatāsūtra を典拠として用いていたことになる。その増広された經典は、敦煌写本中の蔵訳本や Rv 第8章が典拠とした拡大版 Devatāsūtra とは異なるものである。このような Devatāsūtra の傳承の違いは、榎本(1982: 396) が指摘するように、G本や『雜阿含經』のような有部系のテキストや Ratnāvadānamālā が「大衆部の『摩訶僧祇律』の傳承に近い場合もある」ことを考え合わせると、KV の引用の元になったテキストは上記の部派とは異なる部派に傳承されていたものであったこと、少なくとも KV が有部や大衆部とは異なる部派に保持されていたことを示唆する。この推測は、KV の有部所属を否定した先行研究の結論に反していない。

³⁵ 尚、この經典は以下の文献にも引用されている：

『彌勒菩薩所問經論』卷第七、菩提流支譯(T 1525, vol. 26, 260c25027): 「如是施衣得色施乘得樂施燈得眼。施音樂者得淨天耳。如是乃至施髓腦者得金剛身堅固不壞如是等。」

『瑜伽師地論』卷第三十九「本地分中菩薩地第十五初持瑜伽處施品第九」(T 1579, vol. 30, 507a7-9): 「謂施飲食能感大力。施諸衣服能感妙色。施諸車乘能感快樂。施諸燈明能感淨眼。如是等類廣說應知。」

『菩薩地持經』卷第四、曇無讖於姑臧譯「菩薩地持方便處施品第九」(T 1581, vol. 30, 907a22-25): 「菩薩自知。一切種施因緣故。生一切種如實果報。不由於他而行布施。所謂施食得力。施衣得色。施乘得樂。施燈得眼。如是一切應當廣說。」

『菩薩善戒經』卷第四、求那跋摩譯「菩薩地施品第十」(T 1582, vol. 30, 980b25-27): 「如經中說。施食得力。施衣得色。施乘者得樂。施燈得好眼。施房舍者得隨意物。終不_D1A9_得如是等果而行布施。」

『成實論』卷第四、鳩摩羅什譯「分別根品第四十六」(T 1646, vol. 32, 266b16-19):

「問曰。諸外道言。眼中火大多。所以者何。似業因故。因施明得眼。如經中說。施衣得色。施食得力。施乘得樂。施燈得眼。是故眼中火大多。」

Abbreviations and Bibliography

Edition:

- AKBh*: *Abhidharmakośabhāṣyam of Vasubandhu*. ed. by P. Pradhan, 1967 (TSWS 8).
Divy = *Divyāvadāna. A Collection of Early Buddhist Legends*, eds. by E. B. Cowell and R. A. Neil, Cambridge: The Cambridge University Press, 1886.
DPPN = *Dictionary of Pāli Proper Name*, ed. by G. P. Malalasekera, 2 vols., The PTS, 1938 (rep. 1974).
KV = (*Mahā-*)*Karmavibhaṅga*, see Lévi 1932; Kudo 2004a.
Rv = *Ratnamālāvadāna. A Garland of Precious Gems or A Collection of Edifying Tales, told in a metrical form, belonging to the Mahāyāna*. Ed. by K. Takahata, Tokyo: The Toyo Bunko, 1954 (Oriental Library Series D. 3).
Vyākhyā. = *Sphuṭārthā Abhidharmakośa Vyākhyā*. ed. by U. Wogihara, 2 vols, Tokyo: The Pub. Association of Abhidharmakośavyākhyā, 1932-1936 [rep. in one volume].

Bechert, Heinz

- 1961 *Bruchstücke buddhistischer Versammlungen aus zentralasiatischen Sanskrithandschriften, 1. Die Anavataptaḡāthā und die Sthaviraḡāthā*, Berlin (Sanskrittexte aus den Turfanfunden 6).

ENOMOTO, Fumio 榎本 文雄

- 1982b 「『雜阿含』-DevatāsamyuktaとDevatāsūtraの展開 — Ratnāvadanamālā 第八章の成立」『印度學佛教學研究』31-1, 399-96.

Goshima/Noguchi (GOSHIMA, Kiyotaka 五島 清隆 and NOGUCHI, Keiya 野口 圭也)

- 1983 *A Succinct Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the possession of the Faculty of Letters, Kyoto University, Kyoto*.

HIRAOKA, Satoshi 平岡 聡

- 2002 『説話の考古学 — インド仏教説話に秘められた思想』東京: 大蔵出版.

Hoernle, A. F. R. (ed.)

- 1916 *Manuscript Remains of Buddhist Literature Found in Eastern Turkestan*, Oxford.

HONJŌ, Yoshifumi 本庄 良文

- 1983 「シャマタデーヴァの伝へる阿含資料-破我品註-」『佛教研究』13, 55-70.

ISHIGAMI, Zennō 石上 善應

- 1994 「彌勒思想の本質的意味」『文山 金三龍博士古稀記念論叢・馬韓・百濟文化と彌勒思想』金三龍博士古稀記念論叢刊行委員會, 圓光大學校馬韓・百濟文化研究所, 1065-1074.

KAGAWA, Takao 香川 孝雄

- 1963 「彌勒思想の展開」『佛教大学研究紀要』44/45.
 1964 「彌勒と阿逸多」『印度學佛教學研究』12-2, 158-161.

KAJYAMA, Yuichi 梶山 雄一

- 1994 「彌勒の根源」『文山 金三龍博士古稀記念論叢 馬韓・百濟文化と彌勒思想』金三龍博士古稀記念論叢刊行委員會, 圓光大學校馬韓・百濟文化研究所, 1039-1063.

KUDO, Noriyuki 工藤 順之

- 2002 「*Mahākarmavibhaṅga* 所引經典類研究ノート(1) — *Nandikasūtra* —」『創価大学・国際仏教学高等研究所・年報』第5号(2001), 13-26.
 2004a *The Karmavibhaṅga: Transliterations and Annotations of the Original Sanskrit Manuscripts from Nepal (Bibliotheca Philologica et Philosophica Buddhica VII)*, Tokyo: The International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University.
 2004b 「*Karmavibhaṅga* 第61節の付加部分の検討 — 正量部所属説有力資料とされる一節」『創価大学・国際仏教学高等研究所・年報』第7号, 225-254.
 2005 「サンスクリット本『カルマ・ヴィバング』テキスト形成の一考察」『印度學佛教學研究』53-1 (in press).
 forthcoming 「十善業道による世界の損壊—『カルマ・ヴィバング』所説の業報を巡って—」『佛教大学総合研究所紀要・別冊「佛教と自然」』(佛教大学総合研究所「佛教と自然」研

究班研究報告書)。

Lévi, Sylvain

1932 *Mahākarmavibhaṅga (La Grande Classification des Actes) et Karmavibhaṅgopadeśa (Discussion sur le Mahā Karmavibhaṅga), textes sanscrits rapportés du Nepal, édités et traduits avec les textes parallèles en sanscrit, en pali en tibétan, en chinois et en kutchéen*, Paris.

MATSUMURA, Hisashi 松村 恒

1982 「Devatāsūtra と Alpadevatāsūtra」 『印度學佛教學研究』 30-2, 988-982.

MATSUNAMI, Seiren 松濤 誠廉

1965 *A Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Tokyo University Library*. Tōkyō: Suzuki Research Foundation.

Mette, Adelheid

1981 “Zwei kleine Fragmente aus Gilgit,” in: *Studien zur Indologie und Iranistik* Heft 7, 133-151.

MIZUNO, Kōgen 水野 弘元

1989 「漢訳『中阿含經』と『増一阿含經』」 『佛教研究』 18, 1-42 [rep. in 1996, 415-471].

1996 『水野弘元著作集・第1巻』 東京: 春秋社.

NAMIKAWA, Takayoshi 並川 孝儀

1984b 「Cakravartīsūtra について」 『印度學佛教學研究』 32-2, 1069-66.

1985a 「「アビダルマ經」考— *abbidharme cakravartīsūtre* の用例を中心として—」 『佛教大学大学院研究紀要』 13, 1-16.

SAKURABE, Hajime 櫻部 建

1965 「弥勒と阿逸多」 『佛教學セミナー』 2 [rep. in 2002: 148-169].

2002 『阿含の仏教』 京都: 文栄堂書店.

Skilling, Peter

1997 *Mahāsūtra* II. PTS.

TERAOKA, Masahiro 寺岡 正博

1986 「弥勒下生思想の一断面-『説本經』を中心として」 『印度哲学仏教学』 1, 89-104.

WATANABE, Shoko 渡辺照宏

1966 『愛と平和の象徴・弥勒經、現代人の仏教8』, 東京: 筑摩書房 [rep. in: 『渡辺照宏著作集』 第三巻, 東京: 筑摩書房, 1982, 76-82].

(本稿は平成十六年度・科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))による研究成果の一部である)

<キーワード> (Mahā-)Karmavibhaṅga, Pūrvāparāntakasūtra, 『中阿含經』 「説本經」, 『古來世時經』, Devatāsūtra, 『雜阿含經』, 『別譯雜阿含經』, Ratnāvadānamālā